

# 災害復興5周年記念フォーラム

～16年災害を風化させないために～

日時：平成21年9月29日（火）19:00～21:11

場所：西条市総合文化会館 大ホール

要旨：ちょうど5年前の平成16年9月29日の災害経験、要らない経験だったかもしれないが、貴重な経験。これを、どうこれからの安全なまちづくりに生かしていけばいいのか、基調講演、実践発表、パネルディスカッションを通し、参加者のみなさまと共に確認していった。



基調講演では、過去の災害事例から自然災害の軽減は「予防防災」が大事であること、「判断力」「思考力」「行動力」を持ち、自発的判断による早めの自主避難が重要であることなどが述べられた。

パネルディスカッションでは、当時の映像も交えながら、当時の様子と、現在の取り組みについてディスカッションが行われた。

子供達からは、「一人ひとりが 自分の出来ることをやる」、そんなメッセージが発信された。



概要：

**19:00-19:08 西条市長 伊藤宏太郎挨拶**

- ・ 5年前のこの時刻、大変心配の中でのスタートだった。
- ・ 思いを起こす、忘れさせない、そんな「(今日の) この時」に、雨が降り出した。何か因縁か…。
- ・ 16年災害、西条市民の5名の命を無くした。鎮魂、今日の会は意義ある会であると存ずる。
- ・ 当時の被災状況の共有、二度と繰り返させない、自然災害をどう受けとめる。
- ・ 「チーム西条」としての役割。野球チームでは、センター前のボールは、ライトもレフトもカバーに入る。災害に強いまち西条、住みたくなるまち西条、「チーム西条」を作る機会に。
- ・ また、次には「逃げる」、山林、住宅地の災害を無くする、そんな役割がこの会にはある。
- ・ 守ってみせる、これが西条パワーであります。いかに（成果に）つなぐか、「防災訓練」、馴れてい



ることだと思っております。自分のことは自分が守る。527 自治体中、74%の自主防災組織の組織率、自らが勝ち得た「自主防災組織」。命を落とすことなく、けがもすることなく…。

- ・ 戻り川、自治会長さん、川の波が頭ほどの高さに達し、川の水をくむと泥水、「これはやばい」と、役所からの連絡が無い段階で、自主的に全員を避難させた。素晴らしい判断が、まちを守ります。
- ・ 自分達のまちは自分達で守る。これは全てに通じる。
- ・ 防災の基本に立ち戻る機会、災害の無いまち、けが人の無いまちへ。
- ・ ボランティアの力 甲府の災害でも、自然にパワーが出てくる。元気なまちには元気なボランティアが来る。西条の市民パワーは全国一と誇れるものと思っております。

**19 : 11-19 : 59 基調講演「地域防災力の設計」 京都大学大学院 地球環境学堂 小林正美 教授**

- ・ 「設計」は実際にそれをやること。「計画」は作ってもやらないことがある。

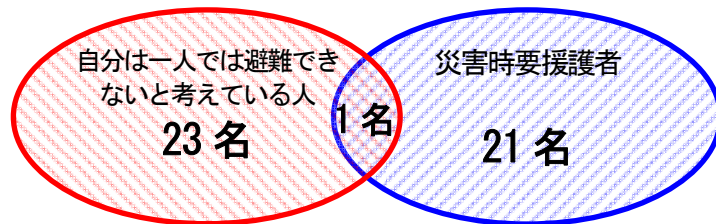
○突然発生する自然災害から、人間は逃げることが出来ないのでは

- ・ **2004年12月26日** インドネシア、スマトラ島沖地震津波災害。バンダ・アチェでは、25万人の市民のうち7万人が亡くなった。
- ・ まちにある建物は全てが壊され、流された。唯一残っていたのは、モスクの建物だけ。1辺25cmの柱に、直径20mmの鉄筋が8本配置されていた。
- ・ 津波は海岸線から内陸に約5kmの所まで達した。「津波があったら避難しろ」では、これだけの距離を避難できない。地震が起きたときには、もう逃げられない。
- ・ 船長が数十mの大きな船が内陸部まで打ち上げられている。家の屋根の上に乗っかっている船もある。
- ・ **1995年1月17日 阪神・淡路大震災** 地震では、家が壊れて人が死ぬ。
- ・ 木造家屋 2階建ての家の1階部分がつぶれてしまっている。開口部の大きい1階と、重い瓦屋根、モルタル（土）の壁が、そんな壊れ方を起こさせている。
- ・ こんな壊れ方をした家の中で、人が生き延びることが出来るとはどんなときか。
- ・ 死亡者の年齢別の分布は、50～60代をピークに、高齢の方が多くなっている。63%の人は「圧死」。
- ・ 自宅で亡くなられた方が86.6%、犠牲者の過半数が60歳以上、老朽した建物で1階に寝室を持っていた人に被害者が多い。建物被害による犠牲者は83.3%。15分以内に亡くなられている方の割合は、 %。
- ・ 「**西条市地域防災計画**」 南海地震が午後2時に起きたとの想定では、全壊家屋10,342棟、死者399名。
- ・ 「**西条中心市街地の地震脆弱調査**」 木造全壊家屋が多いと思われる11自治体、364世帯を対象に調査。



旧耐震基準での木造住宅	91 世帯 (39.2%)
避難困窮者がいる世帯	53 世帯 (22.8%)
65 歳以上の高齢者だけの世帯	78 世帯 (33.6%)
そのうち旧耐震基準での木造住宅世帯	46 世帯 (59.6%)
旧耐震基準の木造住宅で避難困窮者がいる世帯	23 世帯 (10.0%)

- ・災害時要援護者(行政の評価、判定)と、「自分は自分一人では避難できないだろう」と考えている人は重ならない。行政の所有している情報は、現場と合っていない部分がある。



- ・2009年8月11日 東海地震? 監視網に限界  
「予知幻想」: 研究が進み、予知がきわめて困難なことが判明しても、行政と学会はそれを素直に認めない。

- ・2009年8月9日 兵庫の台風9号 兵庫県知事「避難中に流された人もいれば、自宅の2階にとどまって助かった人もいる。今回の災害は地域一体の対応ではなく、状況に応じた対策が必要という教訓を与えた。」 ← 誰が、どう判断するのか?

- ①避難勧告、避難指示 自然の驚異が最も激しくなる「直前」に出される。
- ②事前避難
- ③事後避難 生き延びられていなければ、避難できない

○自然災害の軽減は、予防防災

- ・自然災害は、家が壊れて人が死ぬ。
- ・自然災害が発生してからの避難は難しい。
- ・まず、自分の家を安全にし、そこに避難する。

○12歳教育

- (1) 子供は、災害弱者ではなく、防災の担い手に成り得る存在。
- (2) 社会の課題や問題を考えさせ、社会性を身につけさせる。

- ・自発的判断による、早めの自主避難が重要。 → 「判断力」「思考力」「行動力」
- ・避難のタイミングを逃さないように、その地域の判断基準を持つておく。
- ・自助と共助、そして公助の役割分担

- ・ 真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし
- ・ 山の暮らしは、不便だけど、不自由ではない
- ・ 人間は、自然の営みに対して優しく謙虚であるべき。

### 20:00-20:20 12歳教育の実践発表

- ・ 越智大生（西条市立西条東中学校1年）
- ・ 宮崎雅延（西条市立飯岡小学校教諭）



#### ○防災サミット

第1回

第2回 これまでに実践してきたことを発表しよう

後輩に向け発表、文化祭の収益で非常食を自治会へ寄付 など

第3回 1,069人で考える 「知っている」から「している」へ

○第1回斜面防災世界フォーラム（国連大学）で、26人の小学生が発表

#### ○タウンウォッチング

- ・ 危険なところ、地域の防災施設の確認、地域の好きなところの発見、台風当時のヒアリング、やっていることのヒアリング など

○私はみんなに伝えたい 地域を正しく知り、**身近な人**に広めます！



家族や低学年の人などへ

○吉永小百合さんに手紙を送った 直筆の色紙が帰ってきた

「平和はひとりひとりの努力から。 **あなた達に出来ることをして下さいね**」



**一人ひとりが 自分の出来ることをやる**

### 20:24-21:11 パネルディスカッション「教訓を生かして、私たちは何をすべきか」

- ・ コーディネーター 小林正美（京都大学大学院 地球環境学堂 教授）
- ・ パネリスト
  - 神野顕彰（大保木自主防災会長）
  - 菅野仁美（知的障害者入所更生施設「星の里」施設長）
  - 塩崎武司（西条市連合自治会長）
  - 村上善重郎（大町公民館長）
  - 國田卓二（西条市市民安全担当参与）



○平成 16 年 台風 21 号の状況

**國田**：平成 16 年 9 月 26 日 台風 21 号の状況を映像により紹介

○当時の状況、感じられたこと、思いなどを

**神野**：亡くなられた二人は避難困窮者、災害弱者ではなかった。おばあちゃん、危ないのを知っていたので 2 階に避難し助かった。

**菅野**：当時は外に出ており、携帯電話が繋がらないので異常を感じていた。延べ 2,000 名、遠くは静岡からのボランティア、5 ヶ月半で復旧できた。50 名の入所者はかわりなく暮らしている。本当にありがとうございました。



**塩崎**：ああいうことには二度と遭いたくないと、自主防災組織をと、自治会の方々にお願いした。平成 17 年には 22.4%だった組織率が、今では 70%の組織率へ。「実践防災計画」の説明会も回を重ね、1 万人を超える参加者。

**村上**：避難してこられた方々のお世話をして感じたこと。私自身が初体験であり分かっていなかった。「飯岡の方で大変なことが起きているらしい」程度の認識で、公民館長が分かっていなかった。

まさか避難者が出てくるなんて思ってもいず、(館長は) 家に帰っていた。「避難者が来るので公民館に戻ってくれ」と市役所の課長からの連絡。公民館にはすでに避難者が来ていた。けが人もいた。「何でこんな時に、こんな所に来たんや」と、これまでには来たこともなく、歩いたこともない道路で避難してきた。グループで来ていたのに一人足りなくなっていた。「避難所やから公民館へ」なら、日頃から避難する練習が必要。

また、公民館には 24 時間職員が居るわけではないので、公民館へ行けば(避難すれば)すむわけではない。

責任感、使命感のある主事や館長でないと、すぐに鍵を開けに行けない、避難者にアドバイスをしてあげないかん。災害に対する経験が無く、弁当、毛布など、縦割り行政を感じた。公民館が出来ること、自分出来ることを。

菅野さんの「普段の真摯な行動が奇跡を起こす」、心に残っています。

星の里へ 50 人でボランティア活動に行き、「こんな状況で、良く全員が助かったもんや。日頃から防災意識をもっとらないかん」と感じた。

新しい大町公民館が出来、公民館の役割、どうしたら良いのかと考え、防災士の資格を取りに行った。素晴らしい内容、ガツンと頭を殴られたよう、勉強して良かった。



防災士の会を4月に作ったところ。①防災士の人と手法を使って、計画を立て、防災訓練をしていきたい、②防災士と連携し、いち早く状況を把握すること、情報の収集の方法、連絡の方法、③地域のみなさん一人ひとりへ防災意識を持ってもらえるよう、PR、情報提供、顔の見える活動をして地域に役立つ防災士に。

**國田**：午後3時頃から市役所に市民から苦情の電話。160件、一人に5～10分、5人ほどの職員で対応。市としてやって来たこと、総力を挙げて災害復旧を、約2年でやりあげた。国、県、建設業協会、用地を提供していただいた方々、ボランティアの方々に感謝。

#### 西条市の防災への取り組み方針

- ①市民全員が参加し、主役となり取り組む。
- ②災害に弱い人が助かる仕組みを市民がつくる。
- ③地域の災害文化を共有する。
- ④後世に伝え、災害に強い地域社会を作る。

西条市の取り組んできたこと 防災マップの作成、12歳教育、災害に強いまちづくり、540人の防災士、水害時の水位標100箇所、雨量計、防災百年誌 などなど

○自主防災組織が出来ること、何が出来るのか、どんな助けが必要か

**小林**：避難困難者に自主防災組織が出来ること、今起きたらどんなことが出来るのか、また助けが必要か？

**菅野**：集団で人様の家族を預かっている。マニュアルはあったが、それは火災に対するもので、大雨へのマニュアルではなかった。

裸足で逃げ出すので、擦り傷を負い、無事逃げられたのは奇跡である。自分では避難できない人達なので、避難場所を市に決めていただいたり、身寄りのある人は家へ避難してもらおう。

(入所者の人達は)ものを言えなくても、コミュニケーションが出来なくても、水がきたら、机の上に飛び上がった。命に対する感性を感じた。

50人の子供達をロープでつなぎ、静かに逃げた。なかには抱きついてくる子も多く、避難は難しかった。それで、救命胴衣を用意した。全職員で毎年マニュアルを見直している。下着と食べ物に困った。非常食を用意していたのに、洪水で流されてしまい、「何故、非常食を用意するのか」と不思議に思った → 被災地を支援することが出来る。自分が食べることばかり、使うことばかりを考えていた。

土のうも毎年作り直している。要らない経験だったかもしれないが、貴重な経験である。



**神野**：災害を気に、いち早く自主防災組織を立ち上げ、もう4年経つ。現在、足腰の不自由な方、独居老人など、限界集落となっている。コミュニケーションが密な所ではあるが、現有勢力を考えると、消防や行政の力、元気な人のマンパワーを借りないといけない。

①台風の時には迷惑をかけたらいかんで、2～3日前から息子の所に行く。

②助けて下さいと、ずっと手を挙げる、自分からなかなか言えない山の人達。人の世話にならなければいけないと素直に言える地域づくりを。

○まとめを兼ねて、会場のみなさまへ

**小林**：人が減り、高齢化が進んでいて、助けをもらわないかんの誰でも分かる。隣の自治会との、住民同士の間でどんなことが出来るか。会場のみなさまへのお願いも含めて、いかがですか？

**塩崎**：自治会の会長は、1年交替の所も多く、なったとたん次年度への引継ぎを意識していたりと、温度差がある。防災マップは、**家族で防災会議**をしていただき、その延長線上に自主防災組織がある。

みんなで逃げる、早く逃げる、そんな思いを、願いを入れたのが防災マップ。いつ起きるか分からない災害へのために自主防災組織を作るのは、家庭の防災会議から。



**小林**：12歳教育 これは「大きな宝物を西条市は持っているな」と感じる。12歳、災害弱者ではない。12歳の子供、親といっしょに、大人といっしょに、「自分達に何が出来るか」と聞かれたときに。

子供達は、困っている人がいたら、その人をほっといて逃げていくことはしないと信じている。みんなの「絆」を作っていく上で、強い力となる。次の世代に確実につないでいく「力」。力強いまちづくりのできる「地域力」、そのパワーとなる子供達。

— 以上 —

